

本校における授業実践報告（英語）

－ SGH 事業と普段の授業－

中野 雅也

1 はじめに

本校は平成28年度に文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）に認定された。それ以降、専門科目である音楽科目だけでなく、外国語においても、東京藝術大学の「言語・音声トレーニングセンター」（以下、音トレ）との高大連携授業を展開している。

本稿では、筆者が赴任した平成29年度から平成30年10月現在での、SGH事業による外国語教育が本校でどのように行われているのかを述べ、課題点を浮き彫りにしたい。

2 SGHの取り組み

本校のSGH事業は3つの研究開発単位で構成されている。そのうち外国語（英語）に関わる研究開発である「グローバル・コミュニケーション」では、将来において海外で活躍することができる音楽家を育成する上で必要不可欠な「語学力の強化」を行うことで、多様性を基軸とした交信力および共感力を高めることを目的としている。

その方法として、本校のSGH事業における外国語教育では、(ア)英語の授業における習熟度別の少人数編成による語学教育の充実（最上級クラスは大学と共同授業）、(イ)音楽分野で重要な「ドイツ語」および「フランス語」の選択履修の実現、(ウ)「総合的な学習の時間」における海外等学外派遣プログラムの導入（平成29年度、30年度は英国に派遣）を行っている。このうち本稿では、普段の授業と深く関わる(ア)について詳述する。

3 外国語科（英語）教育課程

(1) 外国語科（英語）教育課程および授業展開

外国語科（英語）の単位数において、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「コミュニケーション英語Ⅲ」はそれぞれ標準単位数より1単位ずつ減じており、代わりに2年次、3年次と継続履修する「英語表現Ⅱ」においては3年次に1単位分増加されている。

表1 外国語科（英語）単位数一覧（カッコ内は標準単位数を表す）

科目	1年	2年	3年
コミュニケーション英語Ⅰ	3 (3)	—	—
コミュニケーション英語Ⅱ	—	3 (4)	—
コミュニケーション英語Ⅲ	—	—	3 (4)
英語表現Ⅰ	2 (2)	—	—
英語表現Ⅱ	—	2 (2)	3 (2)
合計	5 (5)	5 (6)	6 (6)

注：ダッシュはその学年では履修しないことを示す。

(2) 授業の実際

このカリキュラムに基づき、本校ではSGHのための教育課程の変更は行わず、少人数化することにより、最上位グループの「高大連携授業」を含めた授業を展開している。

具体的には、前項(ア)で述べている通り、各学年の授業を習熟度別に複数の少人数グループに分けている。1年次科目の「コミュニケーション英語Ⅰ」では3グループに分け、他の科目については、1クラス展開をしている3年次科目「コミュニケーション英語Ⅲ」を除き、すべての科目で2グループに分けて授業を行っている。

このうち「高大連携授業」では、平成29年度において、1年次科目ではコミュニケーション英語Ⅰ（3単位）および英語表現Ⅰ（2単位）のうち、各1単位、計2単位を時間割上連続して配置し、大学の授業時間帯に合わせて実施した。また、2年次科目も同様にコミュニケーション英語Ⅱ（3単位）および英語表現Ⅱ（2単位）のうち、計2単位を同授業に割り当てた。具体的には本校の3校時（10:30～11:20）、4校時（11:30～12:20）と大学の2校時（10:40～12:10）のうち、共通する90分中70分（11:00～12:10）を高大連携授業のための時間とし、残りの30分は教科書を使って授業を行った。7クラス編成および時間数は表2に示すとおりである。

表2 平成29年度の外国語科（英語）授業展開表

年次	単位数 グループ	1	2	3	4	5	6
		1年	赤クラス	コミュニケーション英語Ⅰ		高大連携授業（70分）	*英語表現Ⅰ
白クラス	コミュニケーション英語Ⅰ		*英語表現Ⅰ（白・青合同）				
青クラス	コミュニケーション英語Ⅰ						
2年	赤クラス	コミュニケーション英語Ⅱ		高大連携授業（70分）	*英語表現Ⅱ		
	白クラス	コミュニケーション英語Ⅱ		*英語表現Ⅱ			
3年	赤クラス	コミュニケーション英語Ⅲ		英語表現Ⅱ			
	白クラス	（40人合同）		英語表現Ⅱ			

注1：「英語表現Ⅰ、Ⅱ」は前後期交代（前期1年、後期2年）で、1単位ずつALTとのTTを実施したことを示す

注2：赤、白、青は、習熟度が高い順に編成されたグループを示す

(3) 教育課程上の問題点

上述のように、3年次科目であるコミュニケーション英語Ⅲを除くすべての授業で少人数授業を行っている。その利点を生かし、高大連携授業以外の授業においても、教科書をベースに学習させつつも、なるべくアウトプットの機会を生徒に与えるようにしている。この点は平成30年度現在においても同様である。

さらに、平成29年度には、1年次の英語表現Ⅰ（2単位）と2年次の英語表現Ⅱ（2単位）は、1単位をALTとのTeam Teaching（以下TT）による英会話中心の授業を行った。ALTとのTTは半期ごとに授業を行う学年を入れ替え、昨年度は前期は1年生の英語表現Ⅰのうち1コマ、後期は2年生の英語表現ⅡでTTを行った。

しかしながら、表2のような本校外国語科における複雑なカリキュラムで授業を運営したため、さまざまな問題点が上がった。

- ① カリキュラムおよび時間割編成の複雑さ（高大連携授業、英語表現Ⅰ・ⅡでのTT）
- ② 高大連携授業が2つの科目にまたがって実施されているため、グループの入れ替えの困難さ

①について、特に昨年度は外国語（英語）科目担当者の時間割が非常勤・専任を含めて複雑化

していた。それは、従来の体制から、特に1年次科目を3展開（3つの少人数グループに分けること）にすることに加え、英語表現ⅠとⅡで半期ずつALTとのTTを入れ替えていたため、一つの科目を曜日によって2人の非常勤講師で担当することがあったためである。このことによる弊害は教員間だけでなく、生徒への指導内容の質の観点でも問題が生じ得たと言える。

さらに、ALTとのTTは高大連携組も含むクラス全員が受ける体制であったため、時期によっては英語表現Ⅰ、Ⅱの教科書を進めることができる時間が1単位分にも満たない時期が1、2年生の赤組それぞれに発生した。これによる授業進度の遅れは著しく、深い内容まで教授することができなかった。

また②については、SGH指定により高大連携授業が開始されて2年目になった昨年度、音トレでの授業に参加している生徒グループである「赤組」に年度途中からの参加を目指し、英語学習に意欲的に取り組む生徒が非常に増えた。

このこと自体は歓迎すべきことであるが、昨年度の場合、音トレでの授業が高大連携という「発展的」性質を含んでいるため、頻りにメンバーを入れ替えるという性質のものではないことが課題として浮き彫りとなった。そのため意欲が高く赤組に途中編入したいと希望している生徒がいたとしてもクラスの再編が困難になった。

このことは1年次科目である「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」の両方に跨って音トレでの授業が時間割上組み込まれていたため、自動的に2科目で同じメンバーが授業を受ける、ということにもつながっている。そのため、高大連携とは関係のない高校単独の授業（英語表現Ⅰ、Ⅱ）において上位グループに編入させようとしてもできないことにつながっていた。

4 今年度（平成30年度）の外国語科（英語）時間割

(1) 改善点およびその効果

前項で挙げた2つの問題点を改善するため、今年度は下の表3のように授業展開を変更した。この変更において重視した点は以下の通りである。

- ① 2科目にまたがっていた「高大連携授業」を「コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ」に固め、「英語表現Ⅰ、Ⅱ」を独立させる。
- ② 1つの科目を2人の講師が担当するという複雑な状況を解消する。
- ③ 赤組が音トレにおいて高大連携授業を受けている間、白組（高大連携授業を受けないグループ）はその時間帯（コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱのうち1単位）にALTとのTTを組み込む。
- ④ 2年生が10月に予定する海外演奏研修旅行を鑑み、前期は2年生、後期は1年生でALTとのTTを配置する。

表3 平成30年度の外国語科（英語）授業展開表

年次	単位数 グループ	1	2	3	4	5
		1年	赤クラス	コミュニケーション英語Ⅰ	高大連携授業 70分	英語表現Ⅰ
	白クラス	コミュニケーション英語Ⅰ	ALTとのTT (白・青合同) ※後期		英語表現Ⅰ (白・青合同)	
	青クラス	コミュニケーション英語Ⅰ				
2年	赤クラス	コミュニケーション英語Ⅱ	高大連携授業 70分	英語表現Ⅱ		
	白クラス	コミュニケーション英語Ⅱ	ALTとのTT ※前期	英語表現Ⅱ		

注：3年生については昨年度と同様のため割愛する

まず①であるが、昨年度は「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」の1単位ずつが高大連携授業にまたがっていたことにより、「英語表現Ⅰ、Ⅱ」での習熟度グループの入れ替えが困難になっていた。しかし今年度は①にあるとおり、高大連携授業を1科目に集中させたことにより、「英語表現Ⅰ、Ⅱ」において、クラス編成に柔軟性を持たせることが可能になった。これによって、成績により赤組、白組、青組の移動が可能となり、生徒の英語学習への意欲が反映される結果となった。

さらに高大連携授業を行っているまさにその時間に、赤組以外の生徒にALTとのTTを受講させることで、英語表現Ⅰ、Ⅱの時間帯は完全に教科書だけに取り組むことができるようになった。これによって昨年度までは「英語表現Ⅰ、Ⅱ」にALTとのTTが組み込まれていたことで、教科書に充当するための時間がかなり少なかった点が解消された。

②については、昨年度は非常に混乱をきたした配置となったが、本来の(通常の)担当の仕方のおおりに、1科目を1人が担当する形に戻したことで、一貫した指導が可能となった。

また③によって、赤組はSGH事業による高大連携授業を受け一方、その他のグループはALTによる英会話の授業を受けることができるようになった。これにより、昨年度は英語表現Ⅰ、Ⅱの単位が半期ずつ1単位減じ、教科書の指導が遅れていた問題を解消することができた。

さらに④については、音トレでの授業の同時展開授業としてコミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱに組み込んだALTとの英会話の授業だが、昨年度は前期が1年生、後期が2年生となっていた。しかし、2年生が海外への演奏研修旅行を控えていることを鑑み、前期は2年生、後期に1年生に英会話の授業を実施することで、年度をまたいで1年間の指導を受ける体制を作ることができた。

以上のような改善を図ることで、今年度は英語の授業を運用した。

(2) 筆者の授業例

さて、筆者が担当しているのは2年次科目「コミュニケーション英語Ⅱ」、「英語表現Ⅱ」(ともに赤組)、3年次科目「コミュニケーション英語Ⅲ」(40人授業)、「英語表現Ⅱ」(赤組)である。

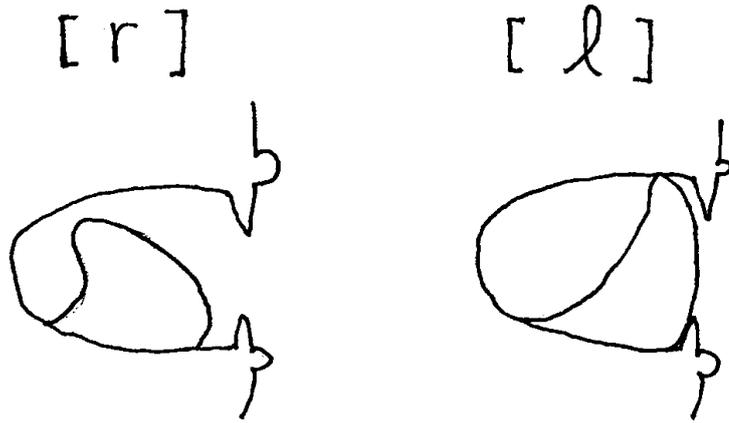
昨年度から継続していることであるが、1、2年生の赤組はコミュニケーション英語において教科書に触れることができる時間が、実際には1.5コマ分ほどしかない。高大連携授業によってICT機器を用いたプレゼンテーション能力が養われている一方、教科書による読解、文法の学習の時間を確保できているとは言いがたい。

そうなる授業では、必然的にポイントを絞った授業を行うことが望まれるが、筆者のこれまでの指導経験から考えるに、ポイントを絞る際に落としてはならないと思われる点がいくつかあると捉えている。

① 発音記号の指導

その一つが発音記号の指導である。これだけを体系的に指導することは教科書だけでは困難であるが、母音・子音の大まかな特徴を、その語が出現するたびに発音指導することになっている。

ハンドアウトを用いての指導は今のところ行っていないが、本校生徒は音に関しては非常に敏感であるので、現状ではホワイトボードに筆者が即興で口周りの断面図を描き、特に上下の前歯と舌の位置が明確に分かる形で図示するようにしている。ちなみに筆者はかなり描き慣れているので、数秒で[r][l]を区別する図などを描くことができる。入試問題にも頻出するが、他にもシュワ母音を用いる語の例と、綴りが似ているが発音が異なる語の指導などにも、この手描きの断面図を用いている(hurtとheartの違いなど)。少々生徒からは笑いが起こるものの、楽しく正しく、そして素早く発音指導を繰り返し行える点ではかなり有利であると考えている。



② 構文指導

あと一つ挙げるとすれば、構文指導である。時代の流れに逆行するように聞こえるかもしれないが、英語だけでなく、言語一般に共通する特徴のうち、特に時制の概念と句・節の概念を1年次から掴ませ、そこから大意把握の指導などへと発展させることが重要なのではないかと考える。このことは、特に筆者が指導し続けてきた高校1年生に品詞の概念（特に形容詞と副詞の概念）を理解し、定着することに非常に時間を要することが多かった経験からも言えることである。

そこで筆者は1年次から、教科書の内容に入る前に、句・節・接続詞の自作問題集を用い、単文から主節と従属節からなる複雑な文まで、簡単な例題を大量に（50例ほど）用意し、それぞれが何の句・節かを判別させ、構文把握を練習させる時間を設けている。

特に1年生には理解に時間がかかるものの、この区別法を身につけない限り、前から順に理解し読み進めていくための「手がかり」を自ら見つけ出すことは困難だと思われる。目標言語の構文把握を無視することは、闇雲に読み進め、並べられた語の意味から文全体の意味を把握する、という極めてあやふやな「脳内文法」に頼ることにほかならない。

自発的に、ほぼ無意識にこの区別ができるようになることで、学習者が触れている文が持つSVOC、そしてM（Modifier；修飾語句）の各要素を瞬時に脳内で判別し、徐々に長い文にも慣れていくことができていく。週に1.5時間という極めて限られた時間ではあるが、最初にこの訓練をしておくことで、文章の大意を把握することが徐々に可能になっていき、脳内の作業負荷が極めて軽くなっていくのだと考える。

巷では、各出版社が出しているいわゆる「文法参考書」と呼ばれる『総合英語』がある。そしてその中では、ほとんどの参考書で句・節が扱われており、内容に関しては詳細に述べられている。その一方で、その概念自体は我々の母語である日本語の修飾関係とほぼ同じなのだということを理解しない限り、学習者が読んだだけで能動的に理解できる概念であるとは言い難いと筆者には感じられる。ほとんどの学習者は、母語での修飾関係は直感的に可・不可について判定できるのに対し、外国語というフィルターを通した途端、それが全くといっていいほどできなくなってしまうように感じる。

前置きが長くなったが、筆者はその句・節の判別演習を行い、それをその語の教科書の指導においても、扱う文章の難易度などに応じて、または発達段階に応じて、細かく判別させることもあれば、大まかな区別だけですませている（たとえば二重限定になっている後置修飾などは詳細に生徒自身に板書に書かせている）。

③ 自作冊子からノートへの書き写しによる「二重学習」

最後に、筆者がどのようにノートをとる指導をしているかに触れる。筆者は作成には多少

時間がかかるものの、時間短縮のためには欠かすことができないという観点から、最初に本文と穴埋め式の行間和訳が記載されたものを冊子状にして配布し、授業ではそれを基に板書事項を記入させている。なぜわざわざ冊子にするのか、というと、1枚だけのハンドアウトは生徒の保管率が非常に悪く、紛失するケースが非常に多いからである。せっかく書き込んだハンドアウトを紛失してしまうと、受けた授業の中身のほとんどを失うに等しいのではないだろうか。

筆者はこの点を解消するために、冊子にするようになった。こうしておくとなりの厚さになり、補助教材のような体裁となるため、冊子自体を紛失する生徒は、ハンドアウトだけを配布していた頃と比較すると、非常に少なくなった。

授業では、筆者は英文だけを書き、それぞれの文の構造把握と内容把握は各生徒に指名して、順番に黒板に書かせている。もちろんすべての文を扱うと時間がかかるため、黒板への記入を省くこともあるが、大まかな流れは1年生から3年生に至るまで同じである。高校3年生には、分詞構文と動名詞の違いや関係代名詞と関係副詞の違いなどを適宜指名し、説明させながら理解を深めさせている。

その後、その課が終わった後は、板書した事項と和訳の穴埋め、内容理解の英問英答問題(穴埋め式)、付録で載せておいた小テスト、および関連英文(この関連英文も、単語・熟語を調べるよう課題形式にしてある)をすべて埋めた状態で提出させる。そして定期考査が終わったときに、全く同じように板書事項を写したノートも提出させている。

生徒にとっては二度手間だと感じる生徒もいるようだが、「二度学習できるのでありがたい」という感想をもらったこともあるので、前任校を含めて10年以上になる指導経験の中で、今はこの形に落ち着いている。

やはり授業内でできることは限られており、生徒が英語運用力をどう伸ばすのかは、授業外の学習時間をどう作っていくかにかかっている。たかがノート、されどノートである。使い次第で、無限の可能性を秘めている。授業内では写すことで精いっぱいでも、定期考査のために別冊のノートに自分でもう一度書き写していくうちに、ゆっくりと確実に理解を深めていくことができるのだと考える。

だからこそ、先に触れたように、前向きな感想を抱いてくれた生徒もいたのだと信じている。

5 おわりに

ここでは主に本校がSGH事業と、通常の英語の授業が抱えてきた問題点を、どのように解決してきたかを述べてきた。筆者の授業方法についてはあまり述べることはできなかったが、本稿で紹介した方法は、少なくとも外国語科教員間では共通理解を図ることができているし、有用性も認められていると感じている。冊子そのものを掲載することはできないが、まだまだ改良の余地は多分にある。

授業の時間数は決められており、何かに多く時間を割くと、他の活動の時間は削らなければならない。現状、1.5時間のコミュニケーション英語をどう運用していくかは、まだまだ創意工夫が必要であろう。しかし、授業中だけでなく、授業外でどのような学習に取り組ませることが可能なのか、そこに自律性があるのかどうか、ということは外国語の習得において避けて通ることができない問題であろう。

できることなら、1年生用の冊子には、発音記号の演習を含めることも視野に入れ、さらに本校生徒の指導にあたっていきたい。